
ラグナロクオンラインSS 超短編 クリスマスの野望！！

梶原 ？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラグナロクオンラインSS 超短編 クリスマスの野望！！

【Nコード】

N7024P

【作者名】

梶原？

【あらすじ】

それは、ある聖夜に起きた出来事！

ある一人を残してみんなキャラ崩壊してます！クリスマス「元々崩壊してて悪かったわね。」

（前書き）

登場人物などは、前作、前々作の長編を読んで頂ければわかるかと思ひます。

このままでもわかりますが、過去投稿作を見ていただけると一層ギヤップが出るかと思ひますよ！

基本ギヤグペースで進みます。ご不快な方がおられましたら大変申し訳御座いません。

ラグナロクSS超短編！ クリスマスの野望！

「それは、とてもとても寒い日の事でした……。」

夜の暗闇に染まる室内に、男女系7人が真ん中に立てたろうそく一本を囲んで何やら話している。

今はすでに12月も半ばなので、室内もかなり冷え込んでいる。

ただ、それ以上に背筋を凍らせるような事が起きているのも事実。

「とある家族のお話です……。父、母、娘と3人仲睦まじく暮らしていました。」

その話しぶりからはぜんぜん睦まじく聞こえないのは気のせいだろうか。

「特に今夜は特別な日、年に一回の聖夜なのです。娘はそれは大層楽しみにしていたそう。母親も家の飾りつけに、手作りケーキ、七面鳥の丸焼きなどお張り切りで父親帰るのを待っていました。傍から見ればただのクリスマスの団欒を話しているかのようなが、それを聞く面々はなぜか顔面蒼白している。」

「しかし、なぜでしょう。今日に限っていつもの時間になっても父親が帰ってきません。」

ろうそくの火がふと揺らぐ。その光景だけで「ひっ！」と声を上げる者が現れた。

だが、話は続く。

「あれ？ パパ今日は帰りが遅いね？ 娘が不思議そうに母親に尋ねます。母親も心配そうに、どうしたんだろうねえ？ と首を傾げます。」

「そう考えていると、トントン、トントンとドアを叩く声が聞こえて来ました。」

話し手の声が一層低くなる。

「あ！パパだー！！と娘が大はしゃぎでドアの方へと近づいていきます。母親も安堵の表情を浮かべながらそれについていきます。」
「が、しかし……。一向にドアが開かれようとはしません……。」

そこで息を飲む一行。

話し手は何かに怯えるようにしながら続ける。

「あれ？パパ？開いてるよー？どうしたのー？娘は不思議そうに話しかけますが、一向に返事は返ってきません。しびれを切らした母親が何をふざけているのかとドアを開けた瞬間……。！」

そこにいる全員が息をするのを忘れる勢いで次の言葉を待つ。

「何とそこには真つ赤な鮮血で染められた服を着た男性が、はいプレゼントだよ、と白い袋に入った父親の首を……。！」

「んな話があるかああああああああああああああああああ！！！！！」
「ぐばああああああ！！！！！」

話し手の顔を思い切り殴り飛ばすクリスマスとエルハイムとリエン。

その勢いで部屋の壁へとめり込んだのはハルトだ。

「な・ん・で・！！クリスマスの話がどつきりびっくり怪談話になんのよ！！！！！」

「うわああああああん！！！！！」

大声で泣いているのはソニアと、なぜか知らないけどエリィだ。

「ぼ、ぼくはう・うそだってわかってたもんね！」

あきらかに顔を引きたせながらアルが強がる。

が、クリスマスの上着の裾を引っ張りながら「トイレ一緒についてきて……。」「とボソツと呟く。

「お前は何歳やねん！！！！！」

つい、どこか知らない言語でつつこんでしまう。

「とにかく！クリスマスはこんな怖い話じゃないし！サンタさんを猟奇殺人犯にするんじゃないわよ！」

気絶寸前のハルトに巻くし立てる3人。

「え……。だってあれだろ……。クリスマスだけに……。クリスマス魔

巢・・・」

「あたしや悪魔の巣窟か！！！」

盛大に蹴っ飛ばす。それでハルトの意識は完全に途絶えた。チーン
「ほらほら、いい加減泣き止んで。これからおねーちゃんが本当の
クリスマスを教えてあげるから。」

未だに泣いているソニアをあやすエルハイム。

「よし、わかったわ。」

すでに意識の途絶えているハルトを殴り続けるのに飽きると

「はい、これからクリスマスとは何なのか選手権大会を開催しまー
す！！！」

突然クリスがそう言った。

リエン「ねえねえ、この世界にクリスマスってあるの？」

クリス「はい次のオハガキー！！！！！」

「第1回！チキチキクリスマスとは何なのか選手権大会ー！！！！ド
ンドンパフパフ」

すでに復活を果たしたハルトがタイトルを発表する。

「せんせー！パクリ臭がぶんぶんしまーす！」

アルのつつこみが入る。

「うるせー！！もうこういうノリなんだよ今日は！今日はこうなの
！」

すでにハルトは開き直っているようだ。

「はい、じゃあ気を取り直してルールを説明します。競っていただ
くのはクリス、エルハイム、リエンの3人。んでこの中で誰が一番
上手くクリスマス伝えられたかが勝負の分け目となりまーす。挑

戦者はこのパネルに書いてある1〜10中の好きな数字を選んで頂いて、それに書いてあるクリスマスにまつわるお題を説明して頂きます。一人制限時間は3分でーす。」

今度はいつのまにかサンタクロースの格好をして、マイクを手に司会を進行するハルト。

その後ろにはいつのまにやら用意された、文字の隠されたパネルボードが1〜10の順番に設置されている。

「せんせー！サングラスはつけないんですかー？」

クリスがそう言いながらサングラスを渡してくる。

「うるせー！！タ。さんじゃねえんだよ！！いい。もじゃねえんだよ！！！」

それを盛大に遠くへと投げ捨てる。

「じゃあまづは3人に抱負を語ってもらいまーす。じゃ、クリスマスか。」

そう言つてマイクを渡す。

「本物のクリスマスって奴が何なのか……。サンタクロースが背負っている過去とは何なのか教えてあげるわ！！」

鬼気迫る勢いでそう言い放つクリス。

「俺もあれだが……。お前も人のこといえねえーじゃねえかよ！

！サンタの過去ってなんだよ！あのひげもじゃに過去とかあんのかよ！！！」

「素人は黙ってなさい。」

「あーもういい、次。」

クリスマスの素人って何だよと思ひながら、終わりそうも無いのでマイクをエルハイムへと渡す。

「あたしの理論が正しければ！！クリスマスに必ずほしい物が手に入ります！！何と今ならこの入会金をお支払いただけで」

「どこの悪徳商法だあっああああ！！！」

これ以上言つては誰か入信してしまいそうなのでつつこまざるをえなかったハルト。

「い、いまならこのプリンターもつけます！」

「ジャパ。ットでやれ！はい、次！！」

ここにはこんな奴しかいないのか、と落胆しながらリエンへとマイクを渡す。

「中国4000年の歴史を」

「いま中国つつたな！！クリスマス関係ないよな！！つてか中国つてどこだよ！！！！」

もうイヤだ……。帰りたい……。ここが家だけ帰りたい……。

「そんな顔をしてたらサンタも逃げちゃうアルよ？」

「勝手にキヤラかえてんじゃねええええ！！！」

もうこいつらに関わってもろくな事が無いと判断し、さっさと次へと進める。

「はい、次は審査員のみなさんです。右から、ソニアちゃん、アル、エリイと……。ん？あれ？」

ここに住んでいるのはこれだけのはずなのだが、なんか4名ほど人の影が見える。

「アクセルだ！よろしくなみんな！！」

「セシルですっす 好きな食べ物焼肉ですっす」

「セロよーん。全国の男達愛してるわーん！」

「忘れてないですよ！私の事忘れてないですよ！！楓ですよ！！！！」

「お前らどっから入ってきやがったあっあああ！！！！」

もう何が何だかわからなくなってきたが、きつと今日はこう日なのだ！と割り切ると決めたのだ、負けるなハルト。

クリス「お題、サンタにこき使われるトナカイ1号、2号の舞台裏での会話。」

ハルト「やらねえよ！？」

アクセル「センパイ、まじあのひげもじゃ殺してーんですけど。」
セシル「しょうがないだろ2号、おれたちやあの赤いひげもじゃのソリ引くしか能がねーんだから。」

ハルト「すたれすぎじゃね!？」

「はい、じゃあ改めまして競技の方に入らせて頂きます。」

今までの事は無かったかのように司会を進行させるハルト。

「何かノリ的にあれっばいよね。ぎん・・」

「はいじゃー！エントリーナンバー1番！ーリエンさあああん!！」

エルハイムの突っ込む言葉を遮り、無理やり話を進めさせる。

「はい、好きな番号を言ってくださいーい。」

「んー、じゃあミスタージャイ。ンツの背番号の3番で!！」

「その選択の意図がわかんねえええええええ!！」

このままでは確実に体力がもたないので、割り切れ自分と言い聞かせ指定されたパネルを開く。

デデン!!

どこからか効果音がした。

「はい、えーと。クリスマスは・・イエスキリストの誕生日ですが?そもそもイエスキリストってなんですか?ノーキリストはいるんですか・・?」

思い切りパネルを叩き割るハルト。

「これは無効。はい、次選んで。」

すでに目が荒んできている。

「じゃーホームラン王の4番で!」

「お前は巨。ファンだったっけか!！」

デデン!!

「ハルト、アウトー!！」

「その効果音じゃねえよ!!!!!!!」

クリスのボケにも突っ込みたくないのだが、どうしても言ってしまう

う。これが性なのだろうか。

「もういい。せめてまともなお題来て。．．ん、はい出ました。クリスマスケーキ！これはいったいどういうものなのでしょうか！」
そこで不敵な笑みを浮かべ、まるで勝ったかの表情で壇上（ここで
お題について語ります。）へと上がるリエン。

それを見て即座に頭に電流が走るクリスマス&エルハイム。

「こいつ．．．。知っているな．．．！！」

クリスマスは思う。

（やばい、まじやばい。実はクリスマスなんてひげもじゃがいたいけな子にプレゼントをばら撒く作業ぐらいしか知らないのに。え、何クリスマス専用の刑期とかあるの！？）

エルハイムは考える。

（どうしよう。クリスマスなんて派手な格好をしたおじいさんが煙突から不法侵入するぐらいしか聞いたことないのに！クリスマス景気の誤字？え、わかんない。）

その光景を見て

「こいつら真剣な表情してつけどぜってえ頭の中ろくなこと考えてねーから。」

完全に見下した目で言うハルト。

「はい、準備できましたかー？」

時計を見ながらハルトが聞く。

「ボクはいつでも大丈夫だよー！」

リエンが完全に勝ち誇った表情で手を振る。

そう、リエンとてクリスマスをろくにしているわけではない。

（これは完全にラッキーだったよ。やっぱり。嶋より世界の。だね．．．。二人には悪いけどクリスマスケーキは知っているんだよ！！）

「じゃーお願いしまーす。」

それと同時に、これまたどこからやってきたのか大きな時間を計る機械が壇上の横へと設置されている。

その時間が、表示の3分から1秒づつカウントダウンをしていく。

「はい、みなさん。今日はクリスマスケーキについてボクからご説明をしようと思います。」

これも余裕なのか、ゆっくりしたしゃべりで展開を始めるリエン。

「クリスマスケーキとは……。」

なぜか静まる室内。

「サンタクロースを誘き出し、自分の望む物を強要させる為の餌です!!」

「んなわけあるかああああ!!」

思い切りマイクをリエンに叩きつけるハルト。ツツコミに男も女も関係無い。

「え!? 違うの!!?」

まるでこの世の終わりを知ったかのように愕然とするリエン。

「そんなこと言ったらサンタさんは行く家行く家全部罠にひっかかってんじゃねえか! ただのアホの子じゃねえか!!」

「そんな……師匠に嘘つかれた……。」

今までの自信を見事に打ち砕かれその場へと立ち尽くすリエン。

「そこまで凹むことなのか、これ。」

「得意げに話してた自分が恥ずかしい……。寝袋があつたら入りたいヨ……。」

「頼むから穴に入ってくれせめて。ただ寝たいだけじゃねーか。完全に真っ白な灰と化したリエンに哀れみの目をしながらも」

「はい、一応ルールなんでね。審査員のみなさん点数をどうぞ。あ、10点満点ね。」

どーせオール1点だろうが、一応採点をさせる。

「はい、出ました。じゃあ右から……。8点、たかつ! 10点、満点っすか!? 100点……。いきなりルールやぶらないでエリイちゃん! 何その含み笑いは!? 餌じゃないよ! ケーキは餌じゃないよ!!」

だめだ、もう出だしからおかしい。

「あとはー、はいアクセル1点(でも心は10点)、先生の答案用

紙みたいな事かかないで下さい。あとセシル……。ん？なにその三角形は？」

「おにぎり。」

「点数を書けよ！！それ何点だよ！！」
もう嫌な予感しかない。

「次セロ、4点（ハルトが私を見てくれません……。）誰も意見なんか聞いてねえよ！頬を染めるんじゃない！」
なんかもう疲れた。

「最後楓、（もつと出番を下さい……。）しらねえよおおお！！！！何なんだお前は！！！！」

あまりにもひどすぎて涙が出てきそうだ。

「一応合計点数、123点+おにぎり+α……。計算できねええええ！！！！」

本当にこの場から逃げ出したいと思ったハルトだった。

クリス「お題、クリスマスに一人寂しく過ごす男の舞台裏。」

ハルト「舞台裏って何だよ。」

アル「氏ね氏ね氏ね氏ね氏ね氏ね氏ね氏ね氏ね氏ね氏ね」

ハルト「卑屈すぎだろ！！！！」

「はい、もう次の人やつちゃって。」

もう何だかこの場の空気に慣れてきた自分がいて少し凹む。

「エントリーナンバー2番！エルハイムです！よろしくお願いします！」

「いや、これアイドル選考委員会じゃないからね。別に水着にならなくていいからね。」

どう見てもクリスマスを説明する気はないのではないか。

「じゃあわたくしこと、エルハイムより皆様へ僭越ながらクリスマスおツリーについてご説明させて頂きます。」

「おい、今おツリーって言ったぞ。」

「何でおをつけたのかしら。」

ハルトとクリスが本人に聞こえないようにボソボソとつつこむ。

「クリスマスとは切っては切れないもの！それがクリスマスツリーです！！」

壇上にある机をバシツと叩いて皆に聞こえるように大きな声を張り上げるエルハイム。

「お、やつとマトモそうだ・・・。」

ハルトが安堵のため息をつく。

「それはどうかしらね。」

ニヤリと意味深な笑みをこぼしながらクリスが言う。

「いやいや、今回は大丈夫だろ。さっきまで変だったけどあのエルハイムだぜ？」

説明に関しては得意分野に入る彼女の事だ。きっと大丈夫だろうと思っっていたら

「クリスマスツリー！それは聖夜に行われる殿方のこか・ブバアアア！」「下ネタかああああああああ！！！」

言い切る前に盛大にハルトに蹴飛ばされる。

「ふふふ・・聖夜じゃなくて精夜とはこのこと・・ね・・・。」

「誰が上手い事言えっていったよ！！！」

そう言っただけ息絶えるエルハイム。

「ねえ何なのこれ。これ今後に影響しないの？大丈夫なの？」

「大丈夫だ、問題無い。」

「エルハイムノカタキヲトルノデス！！」

「お前らうるせー！！！！」

もう誰が言ったのかわからないほどに疲れる。どーせクリスマスとセシルあたりだろうが・・・。

「はい、審査お願いします。」

すでに棒読みになっているハルト。

（家出しようかなあ。）

そう思っていると審査が終わる。

「はいじゃあいつもの如く右から、100000点……。ソニアちゃんエコヒイキはダメだよ。」

「次アル、5点（ボクのクリスマスツリーはきつとこれくらい。）誰も聞いてねえよおおおお！！！」

ついにこちら側まで侵食され始めている。

「と、いうことは……。エリイちゃん、4点（ボケがいまいち、もつとひねりをくわえて下さい。あ、啞えちゃだめですよ。）うるせええええええええええ！！！」

前半の3人でこのザマだ。あとの4人は、もう期待しない事にしよう。

「はいアクセル、10点（自信はあります！）そのツリー切り倒してやろうか、おい。」

「セシル……。だからそれは何！？」

「牛丼。」

「せめて数字書いて下さい！お願いだから！！」

「セロ。3点（ハルトのツッコミがだんだんワンパターン化している気がします、真面目にやって下さい。）……。だから何でおれの総評なの！！？？」

「ラスト楓……。 （水無川 楓13歳！独身です！夢は大富豪になる事です！）さらつと自分売り込んでんじやねえええええ！！」もう帰ってもいいだろうか。何度も言うが自分の家はここだけだ。

「はい合計100022点+牛丼。大差だね、あはははははは！！」

あと一人だ、がんばれ俺と言い聞かせるように高笑いを上げるハルト。

クリスマス「お題、クリスマスの日にいちゃつくカップルに精一杯の笑顔で対応するバイトの舞台裏。」

ハルト「きみのお題は何でこう後ろ向きなのかな？」

エリイ「人の目の前でイチャイチャイチャうぜえんだよ！！」

ハルト「お願いだからエリイちゃんはそのままでいて！！！！」

「あーもう疲れた……。はいラストの人。」

もはややる気など当の昔に消え失せている。

「ついにあたしの出番ね……。」

不敵な笑みを浮かべ、その時を待っていたかのようにゆっくりと立ち上がるクリスマス。

「じゃあ好きなパネルを選んでちょうだい。」

「あたしにはそんなもの不要よ！！」

「しれっとルールを無視すんじゃないやねええええ！！」

そうだ、ラストが一番やつかいだった事を忘れていた。

「いいから番号を言え。」

「エースナンバーの18番。」

「そんなにねえよ！！お前も野球か！！」

デーン！

「あるの！！??」

パネルにはたしかに18番と書いてある。

「本当にあんのかよ……。で、お題は……。クリスマスはセック・。。。」

読み終える前にパネルを爆破処理するハルト。

「何すんのよ。」

「青少年健全育成法ーーーー！！！！！！」

何だ、全てこいつか？こいつが仕組んだ罠なのか！？

怪訝そうな顔でクリスの顔を覗き込む。

「違うわよ？」

「何も言ってねえよ！！早く番号を言え！！」

うーん、と唸り込むクリス。これも演技なんじゃないかと一層疑うハルト。

「じゃああたしらしく1番で。」

「だれが1番だバカヤロウ。はい、パネルオープン！」

○ こゝろ

「もう何の音だかわかんねえよ！！えーとお題は……。おお、正に今回のタイトルにふさわしいクリスマスについてだ！」

「あたしの為にとつてあつたような物ね！」

その割には額にびっしりと脂汗を掻いている。

「どーせわかんねーんだろ。もうめんどいからドロップアウトして、お願いだから。」

「うつさい！！」

そう一喝し、ドカドカと壇上へ上がるクリス。

「下ネタ言ったら一発で退場させっかな。はいじゃーお願いしまーす！」

ハルトがそう言うと同時に、クリスが指をパチンと鳴らす。

それと同時に部屋の照明が落とされ、暗闇に包まれる。

「うお！なんだ停電か！！」

突然の事に驚く面々だったが、すぐに壇上のクリスだけにスポットライトが照らされそれが演出だと気づく。

「話をしよう。」

壇上で俯いたままのクリスが静かに話します。

「随分凝ってんじゃねえか。」

ハルトが少し感心すると

「あれは今から36万……。いや14まブハア！！」「パクリじゃねえか！！」

クリスの顔面へとマイクを投げつけるハルト。

「ま、まって、彼には72通りの名前があつて、たしか最初の名前はサーンツタ。」

「イー。ツクみたいに文字ってんじゃねえよ!!!」
結局全滅だ。というか、いくらなんでもキャラ崩壊しすぎじゃないのか？

「やつぱり何かおかしいだろ・・・。」
ここまで変だと何か作為的な物を感じる。

「よく気づいたわね！そうこれは悪魔の仕業なのよ!!!」
自分でいうのも何だが、すでに復活を果たしたクリスが壇の上に立つて何か超展開を言っている。

「どういうことだ!!」
それでも乗ってしまう自分がちょっと好きだ。

「そう・・・。いつもこの季節にやってきてみんなを浮かれポンチにするそんどもない悪魔・・・。その名は・・・。」

「そ。その名は・・・？」
息を呑むハルト。

「サンタクロース!!」

「お前の妄想じゃねえかああああああああああああ!!!」

この日一番の大声が外に聞こえるぐらいに響き渡る。
それと共に目の前が揺らぐ。

「ん？あり・・・？」
そしてそのまま床へと倒れ込むハルト。

それを見てクリスが一息つき、こう告げる。

「やっと気を失ったわね。ほら、出てきなさいよ悪魔サン・タクロース。」

そうクリスが言うと、気を失ったハルトの体からにゅるっと黒い影が突如浮かび出す。

「よくもまあみんなをここまでやってくれたわね。」
その黒い影を睨みつける。

「キサマ……キツイテイタノカ！」

黒い影がしゃべる。

「あんたはすでに大聖堂で完全にマークされてんよ。大人しく消え去りなさい。」

すでにクリスの瞳には赤い十字が浮かんでいる。

「クソウ！ ココマデヤツ テキタノニ！ 25ニチマデシンデタマルカ
！！オレニハヤボウガアルノダ・・・！！」

苦虫を潰すように悔しながらそう吐き捨てる影。

ちよつと氣になつたので

「あんたの野望って何よ？」

聞いてみる事にした。

「ソレハ・・・！」

「それは？」

「サントノカツコウヲシタオネーチャンニカコマレルコトダー!!!」

!!
L

[illegible]

勢い良くセイクリッド・ジャッジメントをぶつ放す。

「セメテ・・サイゴニオネーチャンニ・・アイタカ・・ツタ・・
・・。」

変な台詞を残し黒い影が消えていく。

それと共にクリス以外の全員が気を失って床へと倒れ込む。

「あーあ、全く。」

その状況にため息をつく。

あの悪魔は、ある一人の意識へと入り込み、その人の特徴を利用して周りの意識すら巻き込んで大暴走をさせるという傍迷惑な奴なのだ。

これが国王とかに取り付かないで本当によかった。権力を乱用されたらそれこそ一大事だ。

今回はハルトがツツコミ役という事もあり、周りが全てボケに回ったという事だ。

「で、何であたしが大丈夫かって？」
うん。

「もともとボケだからよ！何が悪いの！！」
悲しくない？

「泣きたい・・・。」

最後に一言どうぞ。

「メリークリスマス（様かつこいい）マァアァアス！！！！！！！！そして良いお年を！！！！！！！！」

完

2011年も良い年でありますように。 2010年12月25日
梶原？

（後書き）

駄文、失礼致しました。

こういうノリ、書きたかったのです・・。

来年は長編の続きをどんどん書けていけたらいいなあと思います。
サントさん、ボクに文才を下さい！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7024p/>

ラグナロクオンラインSS 超短編 クリスマスの野望！！

2010年12月31日02時51分発行